

## 鳥肌胃炎をめぐる最近の知見

(消化器内視鏡科, 消化器内科) 中村真一

鳥肌胃炎は *Helicobacter pylori* (*H. pylori*) 感染による活動性胃炎であり, 胃前庭部に白色顆粒状隆起が広がる内視鏡所見を呈し, 組織学的にリンパ濾胞の増生を認める胃炎である。若年層, 女性に多くみられ, 胃十二指腸潰瘍や胃過形成性ポリープを認めるとともに, 未分化型胃癌の発生のリスクが高い可能性が報告されている。今回, 2003年5月～2009年12月に当院の上部消化管内視鏡検査で鳥肌胃炎と診断した197例(男性42例, 女性155例, 年齢43.0歳)について検討した。その頻度は0.27%(197/73,035例)で, 男性0.10%, 女性0.49%であった。*H. pylori* 感染率は99.3%(133/134例)で, *H. pylori* 陰性例は *Helicobacter heilmannii* の感染を確認した。臨床症状は心窩部痛, 腹痛42.1%, 逆流感, 膨満感19.3%, 無症状36.5%であった。併存病変として胃潰瘍6例, 十二指腸潰瘍24例, 胃過形成性ポリープ14例で, 胃癌は4例(女性3例)でいずれも胃体部の未分化型癌であった。*H. pylori* 感染症を研究するうえで, 興味深い胃炎である。

## 逆流性食道炎の危険因子の検討

(国立国際医療センター戸山病院人間ドック)

志賀智子・森吉百合子

〔目的〕当院人間ドックで逆流性食道炎と診断された症例に関して, 生活習慣病との関連を中心に検討した。〔方法〕2003年1月～2008年11月に当院人間ドックで上部消化管内視鏡検査を施行した1,793人を対象とし, 逆流性食道炎と各種生活習慣病危険因子との関連を検討した。〔結果〕①逆流性食道炎の危険因子として, 男性, 肥満, 低HDL-C血症に有意差を認めた。②メタボリックシンドロームでは高血圧, 糖代謝異常の2項目を有するものが逆流性食道炎の有意な危険因子であった。③男性では喫煙, 女性ではアルコールが逆流性食道炎の危険因子であった。〔総括〕逆流性食道炎と診断され, 肥満, 脂質異常症, メタボリックシンドロームである場合は, 栄養指導や運動指導が重要である。また, 禁煙, 禁酒指導も併せて重要であると考えられる。

## 最近診断し得た早期食道癌3例, NBI診断例2例を含む

(<sup>1</sup> おぎの胃腸科クリニック, <sup>2</sup> 石川県立中央病院内科, <sup>3</sup> 金沢医科大学内視鏡科) 荻野知己<sup>1</sup>・

土山寿志<sup>2</sup>・伊藤 透<sup>3</sup>

当院では平成3年開業以来13例の食道癌を診断し, 治療機関へ紹介している。〔対象〕13例の食道癌中, 進行癌は7例で, 早期癌は6例あり, 平成19年ハイビジョン内視鏡とNBI診断装置を組み合わせて内視鏡診断を始めた頃から, 3例の食道粘膜内癌を診断し得た。〔結果〕症例1: 80歳女性, 吐血あり来院。中部食道に内視鏡で紅く変色するIIb所見あり, ルゴール, 生検で早期癌と診断。高

齢で心疾患もあり, ESD治療を行った。症例2: 67歳男性, 特記する症状なし。定期的な診断で中部食道にNBI変色と扁平隆起所見あり, ESD治療した。深達度mm, 16×9mm, 深達度m2, tub1の中部食道の早期食道癌だった。症例3: 49歳女性, 胃潰瘍治療中。中部食道にNBIで0-IIc病変を診断しESD治療した。深達度mm, 5×3mm早期癌だった。〔考察〕拡大撮影のない内視鏡診断でも, 注意深い観察で, 食道早期癌の診断の可能性が見られ, NBIはそのチェックに有効だった。

## 低用量アスピリンが *Helicobacter pylori* 除菌後の内視鏡像変化に与える影響

(青山病院消化器内科)

古川真依子・

滝西あきら・田口あゆみ・藤田美貴子・

新見晶子・三坂亮一・長原 光

〔目的〕*Helicobacter pylori* (*H. pylori*) と低容量アスピリン(Asp)は胃粘膜障害の原因として重要な因子の一つであり, *H. pylori* 除菌により胃潰瘍や胃癌発生のリスクは著しく低下すると言われている。今回, *H. pylori* 除菌後の内視鏡像変化に低用量アスピリンが与える影響について報告する。〔方法〕初めにHP(+)の内視鏡的特徴像を体部のびまん性発赤(diffuse redness: DR), HP(-)の内視鏡的特徴像を前庭部の櫛状発赤(red streaks, RS)と定義する。次に, *H. pylori* 除菌後のDR消失, RS出現を経時的に追ひ, Asp(+)と(-)の群で比較した。〔結果〕①DRは除菌後約1年に消失し, RSは除菌後約5年に出現する。②除菌後1年ではAsp(+)と(-)の間にDRの消失に有意差を認めるが, 5年では両群とも全例で消失した。〔結論〕低用量アスピリンは*H. pylori* 除菌後の胃粘膜障害の改善を遅延させる。

## 胃がん検診は経鼻内視鏡出張検診車で行う時代になりました。経鼻内視鏡専用検診車導入後1年半1000例の検討

(<sup>1</sup> 池田病院, <sup>2</sup> 東京女子医大消化器病センター外科) 池田 聡<sup>1</sup>・岡村博文<sup>1</sup>・池田 誠<sup>1</sup>・

中島 豪<sup>2</sup>・後藤祐一郎<sup>2</sup>・大木岳志<sup>2</sup>

経鼻内視鏡検査は, 上部消化管スクリーニング検査としてもはや一般にも広く認知されている。我々は経鼻内視鏡検査システム院内導入後15000症例を経験, 安全性を確認。富士フィルムメディカル社が製作した経鼻内視鏡専用検診車本邦第一号車を導入後1年半で50事業所, 1000例以上の出張内視鏡胃検診を施行している。鼻腔麻酔のみでsedationはしない。そのため安全性が高く検査後の仕事にも支障がない。受診者は, 経鼻内視鏡検査を良いと判断された方が98%, 事業所における内視鏡胃検診を良いと判断された方が94%, 次回の胃がん検診は86%の方が経鼻内視鏡で受診したいと答えている。経鼻内視鏡検診車を導入し事業所の業務に支障をきたさないなかで質の高い胃がん検診を提供することは, 忙しい働